

論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

<p>①・乙</p>	<p>氏名</p>	<p>山川 翔</p>
<p>学位論文名</p>	<p>Safety and efficacy of secondary mandibular reconstruction using a free osteo-cutaneous fibula flap after segmental mandibular resection: a retrospective case-control study</p>	
<p>学位論文審査委員</p>	<p>主査 副査 副査</p>	<p>織田 禎二 田島 義証 奥井 達雄</p>
<p>論文審査の結果の要旨</p> <p>下顎再建術の第一選択は顕微鏡下に直径2mm前後の動静脈を吻合する血管柄付き遊離腓骨皮弁移植術（以下、FFF）とされている。しかし、FFFは高度な技術と豊富な経験を要することから、島根県のような地方では初回に適切な下顎再建を受けられなかった症例に対する二次再建としてFFFを実施する機会も多い。一方、一次下顎再建と二次下顎再建の手術成績を比較した論文は世界的にもほとんどない。申請者らはFFFによる二次下顎再建の安全性/有効性を一次再建と比較・検証する目的で本臨床研究を実施した。対象は2018年10月から2020年2月の間に島根大学医学部附属病院でFFFによる下顎再建を受けた12例（一次再建8例、二次再建4例）で、手術成績を後方視的に検討した。その結果、一次再建と二次再建の皮弁の生着率に統計学的有意差はなかったものの、一次再建では3例に皮弁の部分壊死を認め、二次再建では皮弁は全例で生着した（OR, 5.73; 95% CI, 0.23 - 142.56）。両群間の背景因子の比較で有意差を認めたのは2項目で、二次再建群ではBMIが有意に低かった（22.7 vs. 19.2; P = 0.02）ことと、一次再建では全例で患側頸部血管、二次再建では全例で健側頸部血管をそれぞれ移植床としたことであった。このことから、FFFによる二次下顎再建において良好な皮弁生着が得られたのは、健側頸部血管を移植床血管としたことによるものと考えられた。血管柄付き遊離腓骨皮弁移植による下顎再建術は二次再建例においても安全に実施できることを示した本研究は、今後の臨床への応用と発展が期待でき、博士（医学）の学位授与に値すると判断した。</p> <p>最終試験又は学力の確認の結果の要旨</p> <p>申請者は本学附属病院において形成外科と口腔外科の合同チームで実施した腓骨皮弁による下顎再建術の手術成績を二次再建例と一次再建例に分けて検討し両者に差のないことから、同術式による下顎二次再建が同様に安全で有効であることを示した。関連知識も豊富であり学位授与に値すると判断した。</p> <p style="text-align: right;">（主査 織田 禎二）</p> <p>下顎再建は高難度の手術である。申請者は、本学附属病院で行なった12例の遊離腓骨皮弁による下顎再建症例を一次再建と二次再建に分けて手術成績を比較検討し、より手術が困難な二次再建においても健側頸部血管を移植血管床とすることで全例に皮弁生着を得ることができることを示した。優れた臨床研究であり、関連する知識も豊富で、学位の授与に値すると判断した。</p> <p style="text-align: right;">（副査 田島 義証）</p> <p>申請者は、他施設で機能的、審美的に不適切な下顎切除をなされた患者に対して、適切に施行された下顎二次再建術は一次再建術と同等の予後であることを報告した。本術式が適応される疾患に対する知識、考察も十分であり学位授与に値すると判断する。</p> <p style="text-align: right;">（副査 奥井 達雄）</p>		

（備考）要旨は、それぞれ400字程度とする。